

# 旭丘中学事件が示す政治教育としての学習の方向性

—事件化に至るまでの学校現場における教師の指導を中心に—

後 藤 雅 彦

## Abstract

It is said that the Asahi Junior High School case in 1954 was a crucial turning point which determined the framework of the relationship between schools and politics. It is thought that the case caused a fatal damage to political education in Japan on the one hand, and there is an established reputation that the educational practice in the Asahi Junior High School was an example of excellent political education on the other hand.

This paper pays attention especially to the actual educational practice in the school before the practice came into question. The reason for this approach is because from inside we should reexamine the existing view of this case which has been affected politically from outside. Our analysis of the class newsletters, which were published at that time, reveals that the learning process in the school was gradually becoming stiff and dwarfed. It is necessary for us to review the case in the context of the whole postwar educational history once more hereafter. Also it is necessary for us to pursue what is more desirable political education at school.

キーワード……旭丘中学事件 政治教育 偏向教育 教育二法 冷戦

## 1 はじめに

1954(昭和29)年の旭丘中学事件は、事件渦中に「教育二法」<sup>1)</sup>成立の誘因となり、戦後の「学校と政治との関係の枠組みを決定づける重要な契機」<sup>2)</sup>をつくったとされている。そして事件後これまで、日本における政治教育に致命的なダメージを与え、学校現場における政治教育「タブー視」の元凶となった「逆コース」期の出来事として長く記憶にとどめ置かれてきた。

当時、この学校の教育や教師の指導に対し、「片寄った思想、政治教育が行われているのではないか」とする一部保護者の申し入れに端を発し、これに賛同した保護者や市教委側に対し、当該教師を支持する逆の立場の保護者や市教組側とが鋭く対立した。そして、両者が互いの主張する学校へ生徒を通わせる九日間の分裂授業に至った。

旭丘中学事件が示す政治教育としての学習の方向性（後藤）

時の大達文相や自由党はじめ保守派が、日教組との対決色を強めていく中、折しもこの学校の取組は「偏向教育」の事例として取り上げられた。冷戦構造が定着する国際情勢を背景に、「平和と民主主義の教育をまもるたたかい」の象徴として、マスコミにも大きく扱われた。

「教育二法」が可決成立し、この事件は政治的決着を見た。その後、この学校の教育を総括した『旭丘に光あれ』（五十嵐顕他編、あゆみ出版、1978年発行）の中で、五十嵐顕は「戦後わが国の教育にかぎってみても一朝一夕の成就とはいえない、国民の教育の自覚にたった民主教育の発展の注目すべき環であった」<sup>3)</sup>と評価した。五十嵐だけではない、同書出版に寄せられた関係者（いうなれば当時日教組を支持した識者）のコメントは、賛辞や励ましで溢れている。「賞賛される旭丘教育（矢川徳光/教育学者）」、「『偏向』どころか民主主義の結実です（勝田守一/東京大学）」、「旭丘は導きの星（川合章/埼玉大学）他」<sup>4)</sup>と続く。依然、こうした事件の肯定的な受け止めは、すでに今日に至っては見直しもなく定着した観さえある。

しかし近年、森田尚人は事件当時の「逆コース」について、「国家による教育統制の強化を軸にした教育の反動化のはじまりとみなす戦後教育史の通説的見解は、日教組運動に共感をもつ進歩的知識人の描き出したイデオロギー的自画にほかならない。（途中省略）戦後日本のリベラル知識人はその歴史的経験からほとんど学ぶことのないままに、ソ連擁護の言説を拡大再生産していった」<sup>5)</sup>（傍点後藤）とする、この時期の教育史観を根底から覆す鋭意ある新たな視点を提示した。

本研究は、この森田の視点を足掛かりに、事件を覆ってきた「逆コース」という枠組を外し、もっと学校現場に近い、いうなれば政治教育の出発点となる、教師の取組、教師の政治にかかる生徒への働き掛け場面を内側から再検討する。そして、優れた「民主教育」であったが故に、こうした取組が外側から逆に政治的に運命付けられたとする従来の見方を再考し、今日から見た学校教育における在るべき政治教育の姿を、教訓的に学び取ることを目的とする。

## 2 関連研究と本研究の意図

冷戦構造終了後、改めて本事件を客観的に捉えた稀少な論文がある。それが大久保正廣の論文である。大久保は「この旭丘中学事件の実践は、今日まで教育史の上ではすぐれた民主主義教育実践として評価されることが多かった。しかし、これらの評価は教育政策対教育運動という政治的な対立の図式のなかでの評価であって、今日においては再検討すべき問題も多い」<sup>6)</sup>（傍点後藤）と指摘する。そして、「この事件により客観的に迫るためには、従来からの政治的な枠組みを越えた内在的に捉える視点がより重要」<sup>7)</sup>（傍点後藤）と提起している。

大久保の研究テーマは、学校教育における「規律」問題である。当時「旭丘の主流を形成した教師たちはしつけに否定的であり、HRや生徒会活動を活発化することにより生徒たちが内面化された『規律』を維持してゆくことを期待していた。しかしながらこうしてとられた方法

は学校内外の共通理解を欠いたものであり、期待とは裏腹の生徒の問題行動につながる方向性を持った実践だった」<sup>8)</sup>と、否定的な結論に達している。

戦後初期において民主主義教育の理念が、新教育の中心を貫いていたことは紛れもない事実であったろう。しかし、旭丘中学の学校現場は、「日教組運動に共感をもつ進歩的知識人」が言い当てた程に、優れた「民主教育」とするには早計だったのではないか。このことは、大久保の指摘した「規律」問題以外にも吟味する余地を残しているのではないか。

さらに、この大久保のいう「政治的な枠組みを越えた内在的に捉える視点」で、改めて過去の事件に関連した論文を見直すと、旭丘中学事件発生から2年後の1956(昭和31)年に発表した確井数明の論文が注目される。確井は、当時集めた豊富な研究資料があったにもかかわらず、事件の真相には至っていない実情について、「各執筆や資料作成者の立場、思想など即ち主観的態度が『事件』の観方、解釈に影響している。(途中省略)教組側、市教委側のどちらかに偏っていたために、記者自身が意識せずに『事件全体』を理解しないで、記事にしたために、記事そのものが偏向していたり、部分的でしかなかったりして、事件全体を誤解している。(途中省略)大部分の報道や資料が『旭丘問題』の現象面だけを手際よくなでまわしているが、事件の深層にメスを入れていない」<sup>9)</sup>(傍点後藤)と指摘した。

確井もまた、大久保と同様「政治的な枠組みを越えた」追究に努め、「旭丘中学では、どのような教育が行われていたか」というテーマで解明を試みた。そして、軍事基地や再軍備反対の話をし、「アカハタ」が教材に使用され、授業中に「平和の歌」や「革命歌」や「ロシヤ民謡」が歌われた、文化祭に当時政治的対立が先鋭化していた「内灘問題」をあえて取り上げ、寺島教諭の詩や話が、生徒たちを刺激して「砂丘は生きている」の劇となり、寺島教諭の怒りが遺憾なく表現された他五点<sup>10)</sup>にわたり、これらが事実であったことを突き止めている。

ただし、ここへきて確井の結論は、「旭丘事件の中核に私の研究が接近すればするほど、臼井氏の手記が客観的な洞察に基くものであることが理解されるようになった。そして『旭丘中学問題』の研究が一段落がついた現在では、むしろ臼井氏の鋭い直感力に敬服している」<sup>11)</sup>と、「偏向教育」を示唆しながらも、当時唯一学校を批判的に牽制したとされる臼井の手記を紹介したにとどまった。体制の対立が先鋭化する中、“政治教育の理想の挫折”として圧倒的支持を集めていた本事件の性格上、当時五十嵐ら進歩的知識人の前では控え目な結論にした感が残る。確井が掘み掛けた臼井吉見の手記「『旭ヶ丘』の白虎隊」の「直感力に敬服」した理由や根拠は、封印されたままとなった。このため、本論においてまずこの手記を分析する。

また、事件の核心に迫るためには、もっと事件化に至るまで、つまり事件発生までの取組、教師が生徒に働き掛けた学校現場こそ注視すべきである。事件化によって互いの根拠となった資料は、確井の指摘のように「記事そのものが偏向」し、「部分的」でしかなかった。そこで本論においては、学校の主流を形成した寺島洋之助の学級新聞「入道雲—旭丘教育の一年—」を分析する。この資料は、これまで研究対象として扱われた経緯はなく、政治的にも粉飾されず、

率直に事件前の学校現場の教師や生徒の様子（指導の中身、生徒の反応、地域保護者の受け止め等）が綴られている。

### 3 「『旭ヶ丘』の白虎隊」から読み直す臼井の主張

冒頭述べた分裂授業の末の混乱は、1954(昭和 29)年 5 月に第三者の調停斡旋を受け入れて、ようやく打ち切られた。その当日、臼井吉見は旭丘中学を訪れている。図書室で北小路教頭から事件の経緯を聴き取り、直後に開かれた記者会見にも同席し、この学校の核となっていた北小路教頭、寺島、山本両教諭や彼らを取り囲んだ生徒の人気ぶりを一部始終見ている。そして、臼井は最初の印象を「ぼくはこゝへやってくる前から、今度の事件の根本は、複雑な国際政局のせめぎ合いのなかにある平和擁護のスローガンを、観念的に義務教育のなかにもちこんだところにあるのではないかと思っていたが、この見当に誤りはなかったらしい<sup>12)</sup>と記している。

その後、北小路教頭から「一家庭の中、一クラスの中でも、もめごとがあれば、すべて話し合いで仲よくやっていくという態度が、基本であって、大人になればどんな社会をつくれればよいか、どうすれば世界の国々と手をつなぐことができるか、それを教材に即し、その扱い方を通して考えさせていく。しかし、実際の社会や国家のありかたは、そういうわれわれの求めるものとひどくちがっている。(途中省略)社会科の授業をまじめに進めていけば否応なく社会の矛盾、政治への疑問に生徒の眼がむけられざるをえないし、そこからまた新しい自覚が生まれてくることになる。生徒がまじめに勉強すればするほど、政治に関心をもってくるのは当然のなりゆきであって、この学校の生徒は、朝起きて、顔を洗う前に新聞にかじりつく。しかも第一面の政治記事をむさぼるように読んでいる。かれらの政治に対する要求は強く、したがって手きびしい批判を加えることにもなる<sup>13)</sup> (傍点臼井)と、この学校の教育の説明を受けた。

上記説明に対して臼井は、「朝起きるや否や、中学生が新聞の第一面を読んで、嘆いたり、憤ったりするような状態は、何といたっても変態であって望ましいものとはぼくは考えない。社会科の趣旨にしたがって、勉強させれば、中学生をそういうところまでつれて行かざるをえないような不幸な矛盾を現在の社会が蔵していることはまちがいないが、だからといって、子どもをそこまでつれていくということは別の問題であろう<sup>14)</sup>と反論している。

今日でも、学校現場では政治教育において抽象論やたてまえ論だけに終始しないよう、生の社会の動きや問題も扱うことは、一見理想的な学習の方向を示している。北小路教頭のいう社会科の学習を進めていくことによって、必然的に「社会の矛盾」や「政治への疑問」が湧くことは必至であろう。生徒の中に「新しい自覚」が芽生え、さらにまじめに勉強することで「政治に関心」を持たせることは間違っていない。

しかし、こうした学習の方向の中で、生徒をどこまで「社会の矛盾」や「政治への疑問」と、教育的に対峙させるかという配慮が重要である。筆者(後藤)も中学校で社会科を教えてきた経

験上、一番気を遣ってきたところであり、臼井はこの点を「子どもをそこまでつれていく」と牽制した表現でいい表している。臼井と北小路この両者の見方考え方の差異が、恐らく旭丘中学における教育実践の評価の分かれ目であり、当時としてはほとんど現実の社会や政治の矛盾と向き合わせ、進んで発言し、物事を批判し、解決のために行動することが、学校を挙げて容認されたことが伺える。そのことにより成長していく生徒の姿は、「5 学級新聞『入道雲－旭丘教育の一年－』が映す学校現場」の中で詳述するが、政治教育としてこうした学習の方向が間違っていたらどうなるのか、「われわれの求めるもの」が唯一正しいのか、生徒の正義感に火を点け、社会批判だけの政治教育は適切なのか吟味が必要だろう。

この後臼井は、この事件の契機となった校内の具体的事例（「東京バス案内」他）を生徒会新聞から引用紹介し、さらに先の三教師に対する責任問題へ発展した経緯を記した上で、「三教師が辞任すれば、旭ヶ丘中学の教育が偏向教育と認められ、そうなれば教育二法案の通過を促し、それはやがて日本の戦争突入の機縁になるという、直線的論法は、ぼくにはどうも納得できそうもない」<sup>15)</sup>と、その心情を吐露している。

当時の「反動化」や「逆コース」の中では、一見政治への要求や政治に求める答えは、いまよりも、単純で、分かりやすい社会構図となっていたのではないか。そのことは政治を教える教師の言動にも、「直線的論法」となって現れ、「子どもをそこまでつれていく」ことに戸惑いもなかったのではないか。そして、戦後初期に絶賛された「山びこ学校」の取組も大いに真似た旭丘中学ではあるが、この自分たちの生活や社会の問題（ここでは国際社会に跨る極めて複雑な政治問題にまで発展していた事態）を問うことが、義務教育における管理職のコメントとして、躊躇なく「当然のなりゆき」となっていた。こうした学習の方向は、「いわゆる日本社会の基本問題を学習問題としなければならないという生硬な理論と実践」<sup>16)</sup>（傍点後藤）に矮小化していく命運を孕んでいる。少なくとも臼井はそのことに勘付き、彼なりの言い回しで指摘したかったのではなかったか。引き続き学級新聞の中で考察を続ける。

#### 4 背景としての旭丘中学の歴史

旭丘中学を当時現地調査の末、「旭丘中学校の歩み（歴史的検討）」と題して、勝田守一が論文をまとめている（前掲『旭丘に光あれ』所収）。参考にして取組の舞台となった学校の様子を整理してみたい。

1947(昭和22)年5月、旭丘中学はまだ「待鳳中学校」という校名で、待鳳小学校校舎を併用するかたちで開校している。新しい学制に基づいたこの中学校は、恐らく全国どこでも見られたように、戦後の物資不足の折、仮校舎からのスタートだった。校内も「初期のこの学校では、職員会は、議長もなく、一般に重大な討論もあまりなされない『のん気なもの』であった。『新教育』のこまかい教育技術も、客観的条件が非常に悪いのだから、とてもそのまま取り入れる

ことなどできなかつた」<sup>17)</sup>という。そして2年後の1949(昭和24)年4月に、現在の場所に新校舎の一部(第一校舎)が完成し、生徒数は2倍半、教員数も2倍半に増加した。教員経験のない者が半分を占め、「教師の大部分が、過去の日本の義務教育の因習になじみがうすく、旧制の大学・高専などの出身である若い人々の自由な発言の権利を認めていったことによって、いつそうとらわれない性格をつけ加え」<sup>18)</sup>、初期の頃は自由で開放的な校風だった。

1950(昭和25)年1月「旭丘中学校」と校名が改称され、この頃から教師の働き掛けにより、自主的な生徒会活動が行われていった。生徒会役員を「全校一選挙区投票」によって改選し、一教室を投票場所とし投票箱を準備している。同年7月、『旭丘新聞』も校長から生徒会に発行者が変わって生徒会の機関紙となっていき、1951(昭和26)年4月には、京都市中学校教員組合の副委員長に北小路教諭が就いている。同年8月の日教組第1回全国教育研究大会(日光)「教師の倫理綱領」採択に触発された寺島教諭の報告によって、これまでの旭丘中学における実践を確信し、平和教育の目標を明確にして、さらに職員間で「倫理綱領」の研究を翌年の2月まで続けている。

この年、輪番で受け持つ研究授業に対して、特別なお金を掛けないことと、形式的な研究授業をしないという条件で指導主事が来校した。当日は、『平和教育の問題』について参加者が討論を行ったという風変わりな方法を使った。市教委の指導課は、『旭中は何かが変っている』という印象をもった<sup>19)</sup>という。また、寺島らが原爆の恐ろしさを訴え、戦争反対を叫ぶ生徒の文集を発行したとき、「アカだといわれた」のもこの年である。事件発生はまだ3年前ではあるが、旭丘中学における教育の捉え方やその取組の原型は、すでにこの1951(昭和26)年にあったのではないか。

この点を勝田は、旭丘中学の職員が民間教育研究団体に属していなかった事実にもふれ、「戦前からヒューマニズムと合理的な立場で教育に取り組み、その中で、自主的合理的な教育の実践を蓄積してきた経験に、教科指導の面で学ぶ機会がなかったということもいえるのではないだろうか。旭中の教育が、その目標において高く、その熱意において深いものがありながら、なお教育活動の本来の方法や技術についてはたしてどれだけの用意があったか、という点について、われわれは深く省察しなければならない」<sup>20)</sup>(傍点後藤)と指摘している。旭丘の実践を、政治教育の取組としても高く評価した勝田ではあったが、学習の方向にある教育の方法や技術の点からは見るべきものが少なく、教育の「目標」や教師の「熱意」が素晴らしい程に、返って取組が独善的に陥っている事態に気付いていたのではなかったか。

一方、校内では「生徒たちが、自分の成績評点をよくするために勉強するというような利己主義におちいることに対しては、教師の中にはこれを徹底的に批判し、(途中省略) 考査のために質問をしたり、勉強をしたりする生徒の態度は決して賞賛されなかった。実力を養うということは、正しく生き、幸福な社会をつくりあげていく能力を育てることと考えられていたし、そのための勉強」<sup>21)</sup>が繰り返し指導されていた。

さてこの年の12月、この学校の生徒がいわゆる「人権問題」によって、「社会の矛盾、政治への疑問」に正面からぶつかることになる。この「人権問題」とは、学校帰りの三年生6人が、空想の話題で盛り上がり笑って歩いていたところ、擦れ違った巡査が侮辱されたと誤解をして、生徒らを派出所へ補導し、厳しく尋問指導したというものである。

非道な扱いを受けたとする生徒側のいい分について、直ちに生徒会・生徒会新聞で事の詳細が詳細に伝えられ、教師も生徒の主張を支持し、学校として警察署に事実調査を求めるに至った。「補導の方法を誤った」とする陳謝に生徒・生徒会が納得をせず、「政治に対する要求は強く」「手きびしい批判を加え」、この事件の燻りは京都市議会でも取り上げられた。

この頃、旭丘中学へのアカという風評がさらに強まり、穏便に事を納めようとする保護者の間から、生徒会顧問寺島教諭の責任を追及する声が上がった。しかし、校長はじめ全職員が留任を市教委に申し入れ、翌年3月に問題が一段落している。こういった経緯の中で寺島教諭は、引き続き同校の三年六組の学級担任を受け持ち、以下分析していく学級新聞が発行された。

## 5 学級新聞「入道雲－旭丘教育の一年－」が映す学校現場

本論では、1978(昭和53)年に出版された『旭丘に光あれ』(五十嵐顕他編、あゆみ出版)に学級新聞全文(A5版1頁1,050字(25字21行×2段))にして凡そ160頁)が再録されたものを扱った。

本新聞は毎週月曜日に発行され、1953(昭和28)年4月13日の第1号から1954(昭和29)年3月16日の第50号まであり、途中号外も出た。この新聞の編集には学級の生徒12人が携わり、学級担任である寺島自らの記述が散見する程に、編集生徒や投稿生徒による記事内容(表1)が圧倒的で、当時の生徒の手による旺盛な自主編集発行の跡を物語っている。

表1 学級新聞「入道雲」の主な記述内容

主な記述(その内容)	発行番号
学級生活について(新生活スタート、静止しているHR、夏休みを迎えて、学級で行った売店の仕入れやその売り上げの様子、学級懇談会の様子)	1, 3, 6, 15, 28, 31
アンケート結果について(保護者アンケート、先生の良い点悪い点)	2, 42, 44, 45
家庭訪問について(寺島が家庭訪問した様子をシリーズで掲載)	(3), (5), (6), (7)
校舎問題について(校舎の火災、建て替え運動、陳情の様子、建設対策委員会の様子、公聴会の様子、赤化教育を批判したピラに対する討議の様子)	4, 5, 7, 8, 12, 22, 27, 30, 37, 38, 46
スポーツ・カーニバルについて(校内スポーツ大会結果、その様子)	10, 14, 35

学校生活について(新校舎建設への団結、喧しかった図書館、図書委員リコール問題、あと3か月の中学校生活、新年・新学期への抱負)	11, 17, 26, 29, 39, 40, 41, 47
大水害について(九州を中心に襲った災害を人災批判)	13
平和まつりについて(カンパの様子、参加の様子、平和への考え)	16, 20
座談会について(家庭生活について…親4人生徒7人+寺島、入道雲について…クラス外生徒招聘6人+編集委員全員)	21, 36
原爆記念日について(おそろしい原爆、投下当時何をしていたかアンケート結果、寺島の石川県内灘見学報告あり)	18
修学旅行について(修学旅行を楽しく、不参加者をなくそう、熱海旅行中の出来事、旅行感想・小遣い使用中身アンケート結果)	19, 23, 24, 25
映画「ひろしま」について(映画を観た平和への想い、寺島の平和へ託す詩)	32
文化祭について(米軍基地問題・内灘を扱った劇「砂丘は生きている」のヤジの様子とその反論)	33, 34
高校入試について(受検した感想、高校の門を潜った印象)	48
卒業について(寺島の新生活への期待、卒業記念号としてのこれまでの思い出)	49, 50

(出典) 寺島洋之助編「入道雲—旭丘教育の一年」五十嵐顕他編『旭丘に光あれ—資料・旭丘中学校の記録』あゆみ出版、1978年、342—501頁(第1号～第50号の全内容を主テーマ別再編後藤作成。なお、第9号、第43号は未掲載、号外除く)。

上記学級新聞の全体内容から読み取れることは、寺島が元々英語の教科担当であったこととも関係するが、受け持ちの授業中において具体的に政治的事象を扱った(或はそのことによる生徒の学習反応)の形跡を窺い知ることはできなかった。

しかし、次のような分析観点で、政治教育にかかる学校現場の内側(特に政治にかかる教師の働き掛け)を抉ることはできないか。即ち、学級担任として直接生徒とふれ合った学級活動における寺島の言動(政治や教育に対する本人の信条や生徒へ訴える心情が現れる場面)や、学校生活や学校行事(修学旅行、文化祭)における生徒の言動(教師や学校の出来事への率直な受け止めが見られる場面)を抜き出すことで、その指導現場(政治教育にかかる指導観、指導方法)を検討することはできないか。以下、関連する新聞記事を分析する。

## 5-1 第1号 1953年4月13日発行

新学期、「新しいスタート」と題して寺島は次のように生徒に呼び掛けている。

「進学しようと思う人にも『せまき門』というイジの悪いジャマが待っている。いくら自分



ががんばっても、他人がそれ以上に努力すれば結局負けてしまう。協力とか仲良くとかいっても、最後には他人を蹴落とさなくては競争に勝てない。(途中省略)進学か就職かということも自分の能力や適性できまるのではなくて、家の経済できまるというフシギさ。忘れてはならないことは私たちが将来の社会をつくるということだ。フシギを解決するために今の勉強がどれだけ大切か<sup>22)</sup>と訴えている。

当時も現在も、三年生を取り巻く環境は大きくは変わらない。流石にいまは就職はほとんどないが、三年生は卒業によって新しい進路選択が待っている。高校受検の競争は現在も続いている。ただし、寺島の訴える勉強の意義は、どこまでも理想が高い。愚直とも表現できるものか「将来の社会をつくる」ことを目指し、「フシギを解決する」ため、自分たち周囲の生活や社会の問題矛盾に目を向けさせている。こうした上昇志向は学習の方向として間違っていない。しかし、時に現実に展開する足元を見詰めない“独りよがり”の感さえ漂う。自らが意味で競争に勝って教師の立場にあることを横に置いて、寺島の訴えは続くかに見える。

## 5-2 第2号 1953年4月27日発行

家庭訪問が始まった。それぞれの訪問先での会話を紹介している。

ある家庭の保護者は、「学校では家よりも自分のいいことがいえ、やりたいことがやれるんですね。新教育も大分地についてきましたね。このまま10年もたてば、昔の教育を受けた者よりずっとよくなるでしょう。私らの子どもの頃からみるとずっとしっかりしているようです<sup>23)</sup>と好意的である。

寺島は第1号の中で「保護者のみなさまへ」と題し、4点のお願いを挙げているが、そのうちの一つに、「ものごとに対して絶えず自分で批判するようにしむけて下さい」とある。ここに、「新教育」に込められた当時の生徒像が浮かんでくる。つまり「新教育」の下では、「絶えず自分で批判」し、「自分のいいことがいえ」る力を重視していた。寺島は、折にふれて物事への批判精神を強調している。戦前戦中のものがいえなかった教育の反動でもあろうか。社会批判を意図して指導の力点に置いている。

## 5-3 第4号 1953年5月4日発行

1953(昭和28)年4月29日午後5時30分頃、旭丘中学で出火、8教室が全焼、2教室が半焼した。実際、この火災原因は放火ではないかとの憶測も飛んだが、漏電による可能性も否定できなかった。最終的に出火原因は突き止められなかった。

寺島はこの惨状を次の生徒の切実な声で訴えた。「なぜ、あんなに燃えたか？木造のボロ校舎だからだ。なぜボロ校舎しかたたないのか？予算が足りないからだ。なぜ金が足りないのか？

旭丘中学事件が示す政治教育としての学習の方向性（後藤）

保安隊をつくりロクでもないことばかりに金を使うからだ。結局これは政治家が我々のことを考えてくれないからだ。世の大人たちにのぞむ。我々が安心して学校へかよえるようにしてくれる人を選んでくれるように！軍事費がなくなり、教育費が多く出て鉄筋校舎がなるのは、何周年記念の日だろうか」<sup>24)</sup>。

母校の火災原因について、「軍事費がなくなり、教育費が多く出て」いく社会に込めて皮肉っている点が特徴的である。すでに、生徒の批判の矛先は痛烈な大人社会に向けられており、寺島から見れば、「ものごとに対して絶えず自分で批判する」姿勢を失わない生徒が育っている。しかし、「ボロ校舎」が「鉄筋校舎」に変わるための説明が、「予算」「保安隊」「政治家」「軍事費」「教育費」の言葉だけを並べたのは、何かの受け売りのようである。

#### 5-4 第7号 1953年5月25日発行

家庭訪問に訪れたある家庭でのやり取りである。

寺島「特需というのは日本経済の変態でしょう。」保護者「いや、日本は戦争がないとダメですね。景気がよくなりません。」寺島「(途中省略)私達は、教え子を戦場へおくらないようにがんばっているんです。戦争で景気がよくなってもそれは一時的だし、インフレで物価が上がっても、結局同じことでしょう。さいごは大資本だけのこって九分九厘はひどい目に合うわけだし。」保護者「しかし、その九分九厘の中の一人に生まれた以上しかたがありませんね。」寺島「(途中省略)そうかんたんにきめないで、もっと考えましょう。どうすればこのせまい国土に八千万が平和にたべていけるかを、きっと道はあると思います」<sup>25)</sup>。

寺島の教師としての信条が、この保護者との噛み合わない会話の中に滲み出ている。前後の新聞記事から、この保護者は零細の工場主であり、当時の日本が置かれた現状そのものを代弁しているかのようだ。特需の中で稼がなければ生きていけない社会の矛盾の中で生活する保護者は、きっとこの他にもたくさんいたに違いない。しかし、寺島にはその立場が見えていない。当時の学校を主導した教師の持論は、大かたこうした平和論に終始されたのではないか。先に見た母校の火災原因を綴った生徒もそしてこの教師も、似たような理屈で社会批判だけしている。

#### 5-5 第11号 1953年6月22日発行

校内の教師からの投稿である。

『入道雲』の諸君よ！前途は長く苦しい。『入道雲』が旭丘新聞のような力にまで成長したとき、必ずげいしい圧迫があることを覚悟しなければならない。そのときこそ本当に君たちの真価が問われるときであろう。そのためには『団結と抵抗』が最高の道であることを身をもつ

て知るべきだと思う」<sup>26)</sup>と結んでいる。他の手法を示す教育的な配慮がなく、生徒を巻き込みこれが「最高の道」であったところに、旭丘中学における教育現場の特質が、偏った政治教育として色濃く現れている。

のちに、この時代を社会科教師として生きた大井魁は、「権利と要求の意識だけがあって、それにとまなうはずの責任と負担の意識が失われた。しかもひとびとと自分の生活をよくしその利益を守るために集団の力に頼り、民主的といえど集団を組むことだと都合よく誤解した。労働者も農民も、教師も医者も、主婦も学生も、それぞれに集団を組んで、自分たちの利益の貫徹をはかった」<sup>27)</sup>と自戒を込めて振り返っている。正に同様のことが生徒に対し、迷いもなく「団結」や「抵抗」が教授されていたことが確認できる。

## 5-6 第15号 1953年7月18日発行

夏休みを迎えるに当たり、寺島は一学期を振り返った。

「朝鮮の休戦という大きい問題、そして、MSAや内灘の問題、それから学校の火事など、世界情勢や国内の動きが、一つ一つ私たちの学校生活に深いつながりを持ってきた。そして、それらはみな、私たちを上げまし力づけるものになった。『勉強する』ということの本質が少しずつ分ってきたように思える。(途中省略)新しい教育をうけている私たちは、私たちの親に理解してもらおうよう根気よく話そうではないか」<sup>28)</sup>と訴えた。

寺島の強調する学習の方向が改めて示されている。「世界情勢や国内の動き」を勉強していくことによって、「一つ一つ私たちの学校生活に深いつながりを持って」くる。政治的関心を高めていく点では、こうした出来事に無関心であるよりは望ましい。ただし、「朝鮮の休戦」「MSA」「内灘の問題」「学校の火事」など、どれも中学生が正対して勉強していくにはあまりに重いテーマであり、複雑な社会背景が絡まっているからこそ、角度の違った資料や情報提供も必要な場面ではないか。生徒に丸投げで勉強の意味を強調している。

また、寺島の結論は、こうした政治的事象を生徒と分析検討することなく、「私たちを上げまし力づけるもと」としてすでに捉えられている。当時の知識人にも見られた共通する平和や安全に立ち向かう反体制への抵抗精神のみが伝授されている。身近な「生活に深いつながり」があることは間違いないが、「はげまし」「力づける」勇気まで一気に走るのは、政治教育としても慎重でなければならない。

## 5-7 第23号 1953年9月14日発行

発行日前日の日曜日に開催された「洛北平和まつり」の生徒からの報告である。

「待鳳校講堂で行われた。入場者はひるの部約800、よるの部700で、事故もなく中々盛況

旭丘中学事件が示す政治教育としての学習の方向性（後藤）

であった。（途中省略）小学生が多いせいか、場内がさわがしく、暗幕でしめ切ったためとても暑くて、苦しそうだった。さいごに洛北平和まつりのアピールを旭中新聞部の滝川さんが朗読したが、場内がざわついて効果はなかったようだ。しかし、劇は二つとも子どもにもよく分かったらしく、紫野高校生の柴野君の内灘のお話もみんなに感銘をあたえた<sup>29)</sup>。

政治的団体が主催した「洛北平和まつり」が盛況であったことが伝わる。「平和を守れ」の要求を掲げるというよりも、余興の少ない日常生活の中で、地域の行事を楽しみにしていた様子である。内灘問題を扱った劇を地元小学生も多数見ている。旭丘中学を取り巻く生徒は、こうした環境の中で育ち、政治的関心を高めていったことが窺える。

## 5-8 第24号 1953年9月21日発行

熱海へ修学旅行で出掛けた旅先での発行である。

生徒の会話の中、「なんといっても一枚のふとんに二人ねて、その上ふとんの数やマクラなども足らず、私たちが足らんといったのでは聞き入れられない。先生がいわれたら旅館の人たちはもんくをいいながらも、足りない分をもってこられた。私たちがいえば知らぬ顔して先生がいえば聞くというのはおかしいと思った。私たちの学校の先生は進歩的だからいいが、他の学校では、K先生の話によると、お酒などをのむ先生があるそうだ。それにまた思ったことをどしどしいうと、『赤』だとかなんとかいってにらまれる。このような状態ではどこまでも進歩はのぞめないと思う<sup>30)</sup>と心情を綴っている。

修学旅行中のふとした旅館内の不手際をきっかけに、遠く離れ改めて普段いる自分たちの学校や先生への思いが素直に表れている。寺島らを「私たちの学校の先生は進歩的」で、さらに物事に対して「思ったことをどしどしいう」姿が肯定的に捉えられている。特に「進歩的」という言葉が印象的である。社会批判し「どしどしいう」方向は、戦前戦中に逆戻りしない新教育が齎した一つの性質であり、別のいい方をすればそれは大きな“誤解”でもあったのではないか。「黙ってしまった」ことが戦争を招き、反転し堂々と大人社会さえ痛烈に批判し口を出すことが、当時の「進歩的」価値として受け止められている。

## 5-9 第33号 1953年11月24日号発行

11月の文化祭、劇に出演した生徒の投稿記事である。

「砂丘は生きている」にふれ、「"イヨーツ、共産党"『あいつらは共産党なんだ』というような、あざけりの声 ぼくには その時、あざけりの声にしか きけなかった くやしかった なみだが出そうだった 文化祭で“内灘”の劇をしていたからか 我々が共産党員であるかのような また 共産党が悪いものであるかのような いやな いやな やじだった(途中省

略)」<sup>31)</sup>と綴られている。

そして、劇に出演したこの生徒を寺島は、『くやしかった。なみだが出そうだった』とあなたもいっているように、だれでも『アカ』といわれることは大きな痛手であり、心配のたねです。それだけに、相手をやっつけるのに便利なコトバです。けれども、それに負けてシュンとしてしまったり、いいたいこともいわないようになってしまったら、一体どうなるでしょう。みんながだまってしまうことは、権力者の力をますます強めることになり、ファシズムへ、そして戦争へと進んでいくばかりです」<sup>32)</sup>と説得している。

一つの手法とはいえ、この劇そのものがすでに政治色の強いものであったこと、そして政治色の強いものを子どもが演じることの“ムリ”が、碓井の指摘と共に、会場の他の生徒の反応でも明らかである。また、説得の中に「みんながだまってしまうことは、権力者の力をますます強めることになり、ファシズムへ、そして戦争へと進んでいく」とする、教師の政治に対する主義主張が込められている。この寺島の本心は、体制に対する政治姿勢や自らの政治行動の原理を表明したもので、政治教育を指導する立場として、政治を学ぶ学習方向として、明らかに一方的な偏りが見られる。

#### 5-10 第34号 1953年11月30日発行

「ヤジ」に対するクラスの他の生徒の投稿意見である。

「あの『砂丘は生きている』のヤジは、もっともだと思う。新聞部の旗、”イヨー、赤”はもっともだと思いませんか。“ぼくは悲しかった”、そうでしょう、一生懸命にしているのに、そのような誤解は非常に残念でしょうが、それならなぜ、赤旗など持ってきたのでしょうか。(途中省略)ウワサがとんでいる矢先に、赤旗など持ちだすのはどうかと思う。もちろん、持ちだすなどはいませんが、赤旗を持ちだしてもはずかしくない、その意義と目的をはっきり認識していたなら“残念だ。涙が出そうな…”とは感じなかったと思う」<sup>33)</sup>と、事態を冷静に批判している。

旭丘中学には、恐らく寺島教諭の指導を「進歩的」として受け入れ、忠実に社会の矛盾を突こうとした生徒がいたことは、事実である。先の「ヤジ」られながら内灘の劇を演じた生徒も、その一人に違いない。しかし、対照的に学校の周囲から「アカ」呼ばわりされている中で、「赤旗など持ちだすのはどうかと思う」と感じた生徒もいた。

見落としてはならないのは、決して「赤旗」そのものを否定はしていないということ、その上でその「意義と目的」を再認識し、周囲の状況を考えた適切な判断をすべきだったと忠告している点である。声には出さなかったが、このような生徒の見方が主流ではなかったとしても、間違いなく旭丘中学には残っていた。

## 6 政治教育にかかる学習の方向性

学級新聞が発行された1953(昭和28)年は、事件化以前のある意味で、この学校の理想教育が誇らしげに語られ実践された年でもあった。現にこの年の4月には、教師、生徒、保護者の討論に掛けられ、精神的支柱ともなった「綱領」が発表されている。寺島の同僚山本教諭はこの「綱領」を、当時の「旭丘中学教育の到達点」と評価している。

この「綱領」には、「山びこ学校」にも強く影響を受け、冒頭「だれもかれもが力いっぱいにのびのびと生きて行ける社会、自分を大切にすることがひとを大切にすることになる社会、だれもかれもが『生まれて来てよかった』と思えるような社会、そういう社会をつくる仕事が私たちの行手に待っている。その大きな仕事をするため私たちは毎日勉強している」<sup>34)</sup>と謳っている。辿り着いたこの学校における学習全体の方向が示されたかたちとなった。

そして、これまで見てきたように、その下に展開した寺島の言動は正に、「社会や政治のあり方に、ごく限られた数の『正しい答え』がある時代」<sup>35)</sup>を象徴したものか、当時の世相を反映した「民主」「平和」「平等」といった概念が盛り込まれ、一見、非の打ちどころのない生徒の育成を目指したように錯覚される。

しかし、義務教育という発達段階における中学生の肩に押し掛かるその「勉強」の意味を、改めて適正な政治教育としての側面から考察すると、例えば学習の方向の先にある「朝鮮の休戦」「MSA」「内灘の問題」「学校の火事」といった出来事は、自ずと生徒にとっては、すでに興味本位の対象で片付けるわけにはいなくなる。政治的関心を強く持ち、深く自己の問題や生き方と正対しなければならない。寺島教諭のいうところの「隙間の無さ」がどうしても引っ掛かる。このことは、政治的問題に向かって一つの「正しい答え」を出すときにも見られた。

身近な事件であった「学校の火事」の場合では、「なぜ、あんなに燃えたか？」→「木造のボロ校舎だから」→「なぜボロ校舎しかたないのか？」→「予算が足りないから」→「なぜ金が足りないのか？」→「保安隊をつくりロクでもないことばかりに金を使うから」→「結局これは政治家が我々のことを考えてくれないから」→「我々が安心して学校へかよえるようにしてくれる人を選んでくれるように！」といった生徒の主張に変換されている。

だが、「正しい答え」は一つだけではない。もっと『支配的なイデオロギー』にとらわれず、どういう答えがありうるのか<sup>36)</sup>とする見方や考え方を、多肢にわたって学習する余地が残されていた。こうした学習が旭丘の学校現場の中にほとんど見るできない、というかこうした学習を「無視」したとさえいえる。

一方、修学旅行先では、普段いる自分たちの学校が客観的に映し出された。生徒らはたとえ「赤」のレッテルが貼られても、社会の出来事について大人に対して堂々と「思ったことをどしどしいう」ことが肯定され、またこうした言動を支える「私たちの学校の先生は進歩的だからいい」と受け入れられていた。当の寺島教諭も「新しい教育をうけている私たちは、私たち

の親に理解してもらうよう根気よく話そうではないか」と生徒に説き、「砂丘は生きている」の劇にも、「みんながだまってしまうことは、権力者の力をますます強めることになり、ファシズムへ、そして戦争へと進んでいく」と生徒を励ましていた。

教師も生徒も、同方向を向いていた旭丘の学校現場に対して、佐藤隆は「単に教師が平和や民主主義を価値として生徒に教えこむということではなく、生徒自身が自分の存在をかけがえないものとし、それをよりどころにして、自由に発言し、批判することができる教育的関係が旭丘の実践構造の基本にすわっていたし、そうした学校にしようという意識的な努力がなされていたから(途中省略)平和と民主主義の内的関連を、教師たちも生徒たちも、直観的にせよ読みとることができたのではないだろうか」<sup>37)</sup>と肯定的に評価している。果たしてそうだろうか。

当時の「逆コース」が強調された対決姿勢の中では、こうした佐藤のような肯定的な見方がこれまで支持を集めてきた。しかし、教師も生徒も「新しい教育をうけている私たち」が自覚され、「進歩的」と強調され取組が“頑な”となっていく程に、旭丘中学の、そしてもっと突き詰めれば、戦後の新教育そのものが抱える“限界線”が浮き彫りになってくる。

なぜなら、この学校が「山びこ学校」を真似、政治教育としていわゆる「現実的問題の解決学習」<sup>38)</sup>に挑むが故に、対象となっていく「朝鮮の休戦」「MSA」「内灘の問題」「学校の火事」は戦後社会の進展に伴い、すでに複雑な問題事象となっていた社会背景を正しく捉えた学習対象として扱ってはいない。また、こうした政治的事象だからこそ、政治教育としてはより客観的な分析や互いの意見表明がもっとある学習が教師や生徒に求められるはずである。しかし、そうした学習には手を付けず、単に「思ったことをどしどしいう」ことで、「平和」や「民主主義」の価値に迫ろうとしていた。そして「現実的」という視点では、現に寺島自らも家庭訪問で嘸み合わない議論となった零細工場主の立場があったように、複雑で矛盾に満ちた暮らしが足元で広がっていたにも関わらず、学校を取り巻く地域社会の事態には目もくれず、「平和にたべていける」自論を声高に繰り返していたに過ぎない。

当時もいまま、教師や生徒が一個人として、思う処の主義主張を唱えることに異論はない。「学校の火事」に対しても、「政治家が我々のことを考えてくれない」とする主張自体、一面(真実)を突いていたかも知れない。しかし、これまで見てきたように様々な立場の保護者がいて、また事態を冷静に見ていた生徒もいた学校現場、だからこそ「政治を生徒に教える」という取組には、教師の判断の下で“よく練った営み”が求められる。実際的な場面では、勝田が指摘した教育の方法や技術の点からも、大いに検討の余地は残っていた。

のちに市川博は、「教師又は教師集団の政治的立場を授業の中にもちこむべきではない」<sup>39)</sup>とした上で、「その第一の理由は、教師の考えが必ずしも正しいとは限らないからである。一步ゆずって教師の志向しているものが一応正しいとしても、それを実現する方策が正しいとは限らず、そうした未確定のものによって、子どもの未来をわりつけることは妥当性を欠くからで

ある。その第二に、それは国家権力の教育への介入を防ぐためでもある。教師又は教師集団が、自分たちの信ずる方向へ子どもを導こうとするならば、国家権力は座視してはいまい。当然、教育の目標・内容・方法にわたって、巨大な国家権力を背景にして介入してきて、子どもたちの奪いあいが始まり、政争の渦にまきこまれ、はてはその勝者の意向にそった人間が形成されることになるからである」<sup>40)</sup>（傍点後藤）と指摘している。

正に市川の予言通り、旭丘中学事件は「子どもの未来をわりつけ」て、「子どもたちの奪いあい」の末に、「政争の渦にまきこまれ」ていった。今日政治教育にかかる立場の者が、反面教師として汲み取るべき出来事であり、改めて学び直す必要性が随所に見られた。

## 7 まとめ

政治教育にかかる旭丘中学の学校現場について、外側からではなく内側からその学習の方向性を辿ってきた。当時の「偏向教育」批判の影に隠れて、硬直し矮小化されていく過程が、皮肉にも事件発生によってはじめて露呈したかたちとなった。これまで、「教育政策の『反動化』によって一方的に犠牲になった、あわれな被害者」<sup>41)</sup>という見方は修正しなければならない。冷戦構造終了後の今日、この事件に常に纏わりついてきた、教育二法による「政治教育潰し」（戦後の政治教育低調）を翳した論理は、「左翼的バイアスによって拘束されてきた」<sup>42)</sup>理屈でしかなかった。

明らかになったこの学校現場における同学習方向によって、もし仮にいま政治教育を展開するならば、その教師は相当の覚悟をしなければならないだろう。元来政治教育として子どもに教える以上、そこには常に政治の「何を教えるのか」「どうやってそれを教えるのか」問題事象に対する教師の“政治教育観”が問われているはずである。身近な問題事象が避けて通れない以上、真摯に勇気を持って学習として生徒と向き合い、政治(人間)に対する研ぎ澄まされた洞察の基に、学習として生徒を参加させる教師の姿勢が、昔もいまも変わらず求められている。

本研究を足掛かりに、今後我が国における政治教育委縮の本当の意味を、改めて教育二法成立前後の戦後教育史の中でもう一度教訓的に学び取り、学校現場における在るべき政治教育の追究を押し進めなければならない。

### <註>

- 1) 教育二法「教育公務員特例法の一部を改正する法律」（昭和二十九年法律第五十六号 1954年6月3日公布）及び「義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法」（昭和二十九年法律第五十七号、1954年6月3日公布）



- 2) 佐藤隆「教育政策の「転換」と学校」堀尾輝久他編『〈講座学校 第2巻〉日本の学校50年』柏書房、1996年、84-85頁。
- 3) 五十嵐顕「旭丘中学教育の現代的意義」『旭丘に光あれ—資料・旭丘中学校の記録』あゆみ出版、1978年、24頁。
- 4) 同上書、599頁。
- 5) 森田尚人「戦後日本の知識人と平和をめぐる教育政治—「戦後教育学」の成立と日教組運動—」森田尚人、森田伸子、今井康雄編著『教育と政治／戦後教育史を読みなおす』勁草書房、2003年、4-5頁。
- 6) 大久保正廣「初期新制中学校のHR・生徒会活動における「規律」問題—旭丘中学校実践の再検討—」『日本特別活動学会紀要 第12号』日本特別活動学会、2004年、43頁。
- 7) 同上書、43頁。
- 8) 同上書、50頁。
- 9) 碓井教明「旭丘中学校の所謂「偏向教育」の実態」『島根大学論集(教育学関係)』島根大学、1956年、18頁。
- 10) 同上書、21-27頁。
- 11) 同上書、28頁。
- 12) 白井吉見「「旭ヶ丘」の白虎隊」『文藝春秋 七月号』1954年、207頁。
- 13) 同上書、207-208頁。
- 14) 同上書、208頁。
- 15) 同上書、212頁。
- 16) 山田勉・峰勉著 上田薫監修『小学校社会科の授業⑦ 政治の学習』国土社、1974年、30頁。
- 17) 勝田守一「旭丘中学校の歩み(歴史的検討)」五十嵐顕他編『旭丘に光あれ—資料・旭丘中学校の記録』あゆみ出版、1978年、37頁。
- 18) 同上書、38頁。
- 19) 同上書、78頁。
- 20) 同上書、63-64頁。
- 21) 同上書、78頁。
- 22) 寺島洋之助編「入道雲—旭丘教育の一年」五十嵐顕他編『旭丘に光あれ—資料・旭丘中学校の記録』あゆみ出版、1978年、343頁。
- 23) 同上書、352頁。
- 24) 同上書、353頁。
- 25) 同上書、365-366頁。
- 26) 同上書、377-378頁。
- 27) 大井魁「教師としての思想形成が前提」『社会科教育 №69』明治図書、1970年、13頁。
- 28) 前掲書註22、383-384頁。
- 29) 同上書、410頁。
- 30) 同上書、411頁。
- 31) 同上書、442-443頁。
- 32) 同上書、444頁。
- 33) 同上書、446頁。
- 34) 前掲書註3、594頁。
- 35) 広田照幸『《愛国心》のゆくえ—教育基本法という問題』世織書房、2005年、210頁。
- 36) 同上書、210頁。
- 37) 前掲書註2、88頁。
- 38) 小原友行『初期社会科授業論の展開』風間書房、1998年、437頁。
- 39) 市川博「学力と政治的中立性」『社会科教育 №221』明治図書出版、1981年、125-126頁。
- 40) 同上書、126頁。
- 41) 森田尚人「旭丘中学事件の歴史的検証(上)」『教育学論集 第五十集』中央大学教育学研究会、2008年、

旭丘中学事件が示す政治教育としての学習の方向性（後藤）

124 頁。

42) 森田尚人「旭丘中学事件の歴史的検証(下)『教育学論集 第五十一集』中央大学教育学研究会、2009年、89 頁。

主指導教員（雲尾周准教授）、副指導教員（成嶋隆教授・児玉康弘教授）